

ヤコブ2章14-26節 「行ないのある信仰」

1A 死んだ信仰 14-19

1B 言っているだけの信仰 14-17

2B 見せることのできない信仰 18-19

2A 生きた信仰 20-26

1B 行ないと共に働く信仰 20-25

2B 魂の無い体 26

本文

ヤコブの手紙2章14節を開いてください、私たちはヤコブの手紙が聖書全体の中で大きな役目を果たしているとすれば、ここの箇所になります。「行ないのない信仰は死んでいる」また、「人は行ないによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではない」という言葉であります。私たちと神との関係において、ここの部分がしっかり分かれば、大きな霊的進展を体験できます。同時に大論争を招いています。使徒パウロが、「人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰による(ローマ3:28)」と言ったからです。宗教改革者ルターは、この書簡を「藁の書」と呼んで正典から取り外そうとしたと言われるぐらいです。

けれども、そうした神学的また教理的な見方で、ヤコブ書を読んでしまうとこの手紙の醍醐味を失います。パウロが語っていることとヤコブが語っていることが反対するものではなく、むしろ互いに補完するものであることを読みながら説明していきます。けれどもこの手紙の醍醐味は、これを読んでいる人々が、生身のユダヤ人信者たちであったということです。彼らが迫害を受けて、各地に散らされて、貧しさもあるという背景であります。この生きている場面において起こった出来事から、行ないのない信仰は死んでいるとヤコブは論じているのです。

手紙の始まりは、試練に会う時はこの上もない喜びをみなしなさいという勧めから始まりました。そしてその一つ一つの試練の中で信仰が成熟し、神に与えられた知恵に満ちることができます。そして貧しい人が幸いであり、富んだ者は災いであるという話をしました。この貧しい者という言葉と話している時に、信仰共同体の中にある貧しい者たちのことを意識して書いています。それから、神の御言葉を心から受け入れて、それに応答する、すなわち聞くだけでなく実践する者になりなさいという勧めに入ったのです。そして具体例として、やもめや孤児の世話をする宗教が真実な宗教であると話しました。

私たちは、貧しさと聞くと、どこか遠くにいる人のことを思って、その人たちのところに届かなければいけないと思います。迫害されているクリスチャンのために祈ろう、とか思います。しかしヤコブは、基本的に「あなたがたの間にある貧しさに対して応答しなさい。」と言っているのです。教会の

只中、礼拝の時にいつの間にか、貧しい人がないがしろにされて、富んだ人に席を案内するということが起こっています。私たちの日本社会は、そのような経済格差がないので、このような場面に出くわすことはごくわずかですが、この日本も精神的、霊的な貧しさ、その苦しみは計り知れないものです。あまりにも問題が山積しており、そうした日本人が集まれば、当たり前のように礼拝や教会の中にも入ってきています。その苦しみに共にいることこそが教会の使命なのです。

ですから、目の前にいる兄弟姉妹たち、御霊の働かされているキリストの体において、その貧しさを知らない、関心を持たない、祈らない、そして見た目には良いことを追い求めることが、ヤコブが見ている私たちの偽善性です。ヤコブは「宗教で熱心であると思っても」と言っています。熱心であるから霊的であるという錯覚を持つ私たちです。そのことについて、前回、ヤコブ 2 章前半部分で学びました。

今日の本文の始め 14 節は、その手前の節の続きになっています。12 節、「自由な律法によつてさばかれるものらしく語り、またそのように行ないなさい」とあります。自由な律法とは、キリストの律法のことです。キリストがモーセの律法の要求を全うしてくださいました。その死によって全うしてくださいました。ここに現われたキリストの愛の中に根ざし、自分自身のように隣人を愛します。そして 13 節ですが、イエス様が「憐れむ者は幸いです。憐れみを受けるからです。」と言われたように、私たちが神の憐れみの中に、自分自身がその憐れみの中にいるだけでなく、他者にも憐れみをかけることによって、初めて神の憐れみの中にあることができる、というものです。

私たちが、他者の苦しみと共に生き、祈り、必要な助けを与えることによって初めて私たちは、他人を裁くという罪から免れることができます。もし、積極的にその貧しさの中に関わっていなければ、人を裁く罪、えこひいきという罪を犯しているのです。その目は、安定している表面的なもの、落ち着いているもの、いつもと変わらないものだけを見て、食べることや飲むこと、そうした他の事柄に目を向けています。その誤った判断が、裁きの罪であるとヤコブは論じています。

1A 死んだ信仰 14-19

1B 言っているだけの信仰 14-17

2:14 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。

ヤコブは再び、「私の兄弟たち」という呼びかけから始めています。彼らにとって信仰は、個人的なものではなく、あくまでも互いがつながっている共同体的なものです。そしてこの節で大事な言葉は、「信仰があると言っても」の「言っても」であります。「神を信じます、イエス様を信じます。」と言っているけれども、相応する行ないがないなら、何の益になるでしょうか？ということ。私たちは、霊的な会話、おしゃべりをするのはいっぱいできます。そして、霊的なことを話している人々が霊的なように見えます。しかし、自分自身にその霊的な会話に相応する実が結ばれているで

しょうか？使徒パウロは、「もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。(1コリント 11:31)」と言いました。まず、有体に、正直に、自分が話している事柄について、自分がどこまでの実を結んでいるかを確かめてみましょう。

そして、「何の役に立ちましょう」という問いかけは、もちろん「何の役にも立たない」ということです。後で、「むなしい」(20節)という言葉が出てきます。全く意味がない虚しさです。

そして、「そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか」と言っています。ここで、多くの人が誤解をします。「パウロが、行ないによるのではなく、信仰によって救われると言ったのに。」と思います。今ヤコブは、行ないによって救われることを話していません。神の真理は信仰のみによって救われます。しかし、その信仰は必ず行ないによって現れるのだ、ということです。行ないではなく信仰によると言ったパウロの言葉を、文脈をもって読んでみましょう。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇ることをないためです。私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。(エペソ 2:8-10)」恵みのゆえに、信仰によってのみ救われるのですが、その後ですぐに良い行ないをするために造られた、とあります。ですからパウロも、ヤコブと全く同じ「行ないの伴う信仰」について話していたのです。

恵みによってのみ与えられる、信仰だけによる救いを受ければ、そこから愛が生まれ、希望が生まれます。そこで愛と希望に裏打ちされた信仰の働きが現れるのです。「絶えず、私たちの父なる神の御前に、あなたがたの信仰の働き、愛の労苦、主イエス・キリストへの望みの忍耐を思い起こしています。(1テサロニケ 1:3)」信仰に働きが伴います。そして愛にも労苦があります。「どうすれば愛が伝わるのか」という疑問があれば、簡単です。労苦しているかどうか、であります。労苦することが義務的である、律法的であると考えは偽りです。愛は労苦の中に現れるのです。

2:15 もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、2:16 あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい。」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。

先ほど話した通り、これは良く分かる例えではなく、彼らの間で実際に起こっていたことであります。ヤコブは興味深いことに、兄弟のみならず姉妹と付け加えています。性差別もしないように、きちんと世話するように注意しているのでしょう。そして、着る物に対して「暖かになりなさい」と言います。そして食べ物について「十分に食べなさい」と言っています。けれども、実際に着る物を与えておらず、食べる物を与えていません。使徒ヨハネも同じことを言いました。「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実

をもって愛そうではありませんか。(1ヨハネ 3:17-18)」

この挨拶「安心して行きなさい」というのは、ユダヤ人の別れの挨拶の言葉です。例えばナタンがダビデに、「では、安心して行きなさい。私たちふたりは、『主が、私とあなた、また、私の子孫とあなたの子孫との間の永遠の証人です。』(1サムエル 20:42)」と言いました。ですから、挨拶して、言葉だけで終わらせている信仰です。教会の中で、言葉だけになっている交わりは空しいものです。挨拶はするかもしれない。いや、することさえしないこともあります。後は他の人たちには関わらない、気にかけない、自分のエネルギーはしっかり節約しておく。このようなエコ的信仰が、ここで言っている言葉だけの信仰です。

2:17 それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。

「死んでいる」という強い言葉を使っています。これは先ほどの「人を救うことのできない信仰」と同じことであり、死んでいるということです。ここで大事なものは、ヤコブは「信仰」と「行ない」を対比させていないということです。「行ないのともなった、生きた信仰」と、「行ないのない、言葉だけの死んだ信仰」の比較です。生きている信仰には必ず行ないが伴います。行ないのともなわない、言っているだけの信仰は、内側から完全に死んでしまって、役に立たない、無力だ、ということです。

2B 見せることのできない信仰 18-19

2:18 さらに、こう言う人もあるでしょう。「あなたは信仰を持っているが、私は行ないを持っています。行ないのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行ないによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」

ヤコブは、次の話題に入っています。信仰と行ないの違いを、はっきりと示しています。それは何か？「見せることができるかどうか」であります。信仰そのものは、目で見えないものです。ヘブル書で学びました、「信仰は望んでいる事からを保証し、目に見えないものを確信させるものです。(ヘブル 11:1)」目に見えないものを確信させるものです。けれども、行ないは見ることができます。

多くの人が、「信じているけれども、行なえない。」ということを話します。しかし、その比較は正しくありません。行っているところに、その人が本当は何を信じているのかが現れている、というのが正しいです。信仰には、行ないをもたらす力と源があります。その行ないによって信仰があるのかどうかを示すのです。例えば、私たちはこの椅子が壊れないと信じているから、座っているのです。座っているということは、この椅子が自分を保つということを信じて座っているのです。座るという行ないに、その信仰が現れています。

伝道をする時に、次の例えがあります。世界で天才的な綱渡り師がいます。どんな困難なところも、これまで一度も失敗なく渡ることができました。今、目の前に崖から崖に一步の綱があります。

そして、彼の上に人がおんぶして渡るといことになりました。見ている人々に聞きます。「この人が向こう側に渡れると思う人？」と尋ねたら全員、答えます。「では、自分が彼の上におんぶしてもらおうという人？」と尋ねたら、誰一人もいません！向こう岸に渡れると信じているつもりで、実は信じていないのです。おんぶしてもらおうという行為で、初めてその人が綱渡りの天才であることを信じられているのです。

カンファレンスで、「愛によって成長する」のところで、次の話がありました。どうやったら兄弟たちが互いに愛し合うのか？第一の答えはとても単純でした。「教会に行く」であります。教会にこそ兄弟たちがいるわけであり、そこに行くことはまさに兄弟たちを愛しているという最低限の行ないです。交わりから離れるのは、自分がそこから何かを受けたいと思っはいるけれども、与え施す、愛していないことを示しています。行ないによって、信仰が試される、証明されるのです。

2:19 あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。

これは、ユダヤ人信者の中では馴染みのある信仰告白です。「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。(申命 6:4)」神はおひとりだ、というのは、ユダヤ教徒は今でも毎安息日に告白している内容です。私たちであれば、「私たちは、イエスがキリストであり、主であることを信じます。」と言っているのと同じです。

この告白自体は立派です。しかし、それでは十分でないことを、ヤコブは悪霊どもの例を出しています。「すると、すぐにまた、その会堂に汚れた霊につかれた人がいて、叫んで言った。「ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょうか。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」(マルコ 1:23-24)」身震いしている、とありますが、これのギリシヤ語はその通りで、怯え震えて、毛が立っているぐらいの意味合いがあります。それだけ信じていても、悪霊どもはもちろん神の救いを受けていません。

ですから、聖書を学び、聖書から神についての正しい知識を得て、それで救われているのではありません。正しいことを信じていることで満足している時はこの御言葉を思い出すべきでしょう。

2A 生きた信仰 20-26

1B 行ないと共に働く信仰 20-25

2:20 ああ愚かな人よ。あなたは行ないのない信仰がむなしいことを知りたいと思いませんか。

ここの「愚か」は、空しい、何もない、という意味です。つまり、論しても、論しても、まだ何も分からない愚かな人、ということです。なぜ分からないのか？「知りたいと思いませんか」とここにありますが、これは「進んで知ろうとしていますか」という意味です。知ろうとしない、行ないのない信仰

がむなしいことを知ろうともしない、興味がない、意図がないということです。「むなしい」と書かれているのは、不毛とも訳せる言葉です。聖書の中では、利息のない金、耕さない畑、不妊の女などに使われている言葉です。ですから行ないがなければ、その信仰はこのような状態なのだとは責めています。

そしてヤコブは次に、行ないのともなった信仰を持っていた人たちを二人紹介します。一人はアブラハムです。次にラハブです。非常に興味深い組み合わせです、ユダヤ人の族長と異邦人の遊女です。そのどちらもが等しく義と認められました。ここに福音があります。しかし、その義認は行ないによって示される信仰によったのだというのが、ヤコブがここで言いたいことです。

2:21 私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行ないによって義と認められたではありませんか。2:22 あなたの見ておるとおり、彼の信仰は彼の行ないとともに働いたのであり、信仰は行ないによって全うされ、2:23 そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。」という聖書のことが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。

ユダヤ人にとって、アブラハムは「父」です。これは彼らがいつも、アブラハムをそう呼びます。私たちはローマ人への手紙において、アブラハムが、割礼を受ける前に神を信じて、その信仰が義と認められたという話を読みました。そのオリジナルは創世記 15 章 6 節にあります。けれどもヤコブは、話を終わりから始めています。つまり、創世記 22 章のイサクを祭壇に捧げる時からのことです。創世記 15 章 6 節にあって、「神を信じ、その信仰が義と認められた」という言葉が、22 章のイサクを捧げるところで、確かにそれは義と認められる信仰であったことが証明された、ということです。ですから、「行ないによって義と認められた」ということが、救われるための条件としての話では決してなく、義と認められるような信仰は、行ないによって証明されたということでもあります。

22 節に、「彼の信仰は彼の行ないとともに働いた」とあります。信仰と行ないが一セットになっています。元に戻れば、アブラハムがウルの町を出ていく時も、神に召されてそれに応答し、出ていくという行ないが伴ったものでした。アブラハムの信仰は、ただ神を信じるというものでありましたが、それは動的であり、生きた神との交わりの中で行ないが自ずと表されたのです。それがずっと続きます。アブラハムは失敗をたくさんしました。それでも神が恵みをもって祝福してくださいました。そのために、アブラハムは神への信頼が増しました。その結果として、主にあなたの愛するひとり子イサクを捧げなさいと命じられた時に、そのまま信じることができたのです。そしてその信仰が行動に移りました。

「全うされ」という言葉があります。これは、彼の信仰が証明されたということです。行ないの中に証明されました。そしてもう一つの意味合いがあると思います。試練を受けた時に 1 章 4 節で、「何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」とあります。つまり、成熟した者、信仰が健全な者、バランスを取れた者という意味になります。

そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。」という聖書のことばが実現し」とありますが、ここで大事なのはアブラハムが実現させたのではなく、聖書の言葉が実現したということです。「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は強く信じているのです。(ピリピ 1:6)」主がご自分の言葉を、実現して下さいます。そして、それは私たちの意志の中で働いて下さいます。「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いを達成して下さい。神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。(2:12-13)」

信仰が彼の義とみなされた、という言葉があり、この信仰が行いと共に働いてそれで全うされたから、その言葉が成就したということになります。

そしてアブラハムは「神の友」と呼ばれました。ユダヤ人はアブラハムのこの別称をよく知っています。「しかし、わたしのしもべ、イスラエルよ。わたしが選んだヤコブ、わたしの友、アブラハムのすえよ。(イザヤ 41:8)」彼が、神を信じるというところにこのような親密な関係があったのです。ですからただ単純に、神を抽象的に信じたものではありません。またやみくもに行動に移していくような機械的なものでもありませんでした。

2:24 人は行ないによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。

ここまでじっくりと読み進めたら、24 節のここの意味がもうお分かりになったのではないかと思います。行ないによって義と認められるとヤコブは強調していますが、それは信仰が行いを生み出し、その行いを生み出す信仰によって義と認められている、ということです。私たちが行えば義と認められるということではありません。ですから先ほど、神がひとりだと信じていても、悪霊もそう信じているし、震えおののいているとあります。信条を受け入れたということが真の信仰ではないのです。これが、行ないを伴うような原動力を持つ信仰によって受け入れる時に救われます。

2:25 同様に、遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したため、その行ないによって義と認められたではありませんか。

ヤコブは思い出したように、ラハブを挙げています。とても大事なことは、先ほども話したように、彼女はカナン人つまり異邦人であり、かつ遊女だったということです。義認は決して、その人の素性や行ないによって妨げられることはないことをよく表しています。しかし、信じることによってその行いが確かに、彼女の中にも表れたのです。ここの動詞はギリシヤ語では、エネルギーに溢れた行動になっているそうです。それが、命を決してイスラエルの使者たちを招き入れ、招き入れただけでなく別の道から送り出しました。なぜここまでの危険を犯したのか、ヨシュア記によれば、彼女

がイスラエルには神がおられ、神がカナン人を滅ぼされるご計画も知っていたからでした。この方こそが救い主であることを信じていたので、彼女は使者をかくまって、自分と自分の家族を救ってほしいと彼らに話したのです。

2B 魂の無い体 26

2:26 たましいを離れたからだが、死んだものであるのと同様に、行ないのない信仰は、死んでいるのです。

私たちは以前、「死」というものの定義を学びました。死というのは別離であります。引き離されることでもあります。ですから、魂が体から離れたら死んでいるということになります。この例えによって、信仰に行ないが結びついていなければ、死んだも同然なのだと言っているのです。

興味深いことに、ヤコブ書を藁の書と言ったルターは、ローマ人への手紙の注解の初めに、信仰をこう説明しています。「この信仰は、なんと忙しく、活発で、力強いものか。」信仰というものは、絶え間なく良いことを行なわずしては不可能である。信仰は、良い行ないをしなければいけないと尋ねることはないが、その質問がなされる前に、すでにその行いを果たしているし、絶えず行っているのだ。このような行ないのない者は誰でも、信仰者ではない。」すごいですね、これほど上手にヤコブが 2 章で語っていることを説明している文はありません。これが、行ないによらず、信仰によって義と認められると論じたパウロの手紙の注解にあるのです。

そして今回は、口を制することです。ここが深い結びつきがあります。行ないのともなわなない信仰、言っているだけの信仰においては、行ないがないために口だけになっていき、大きな口となり、それで過ちを犯します。行ないのともなわなない信仰によれば、自分の行なっていることだけを語るのです、それほど語ることはありません。これは口数が多いとかそういう意味ではありません。その言葉に行ないという裏打ちがあるため、慎み深さが伴っているのです。